



LA NOUVELLE

N°11

AUTOMNE

東京外語協会
〒113-0033 東京都文京区本郷 2-14-10
本郷サテライト 東京外語協会付
発行責任者 藤倉洋一 (昭45)
2013.9.27 発行

第18回 仏友会総会

4月20日、恒例の仏友会総会が東京・大手町サンケイプラザで開催された。出席者は62名であった。

藤倉会長の挨拶、金澤副会長の会務報告などに続いて、渡邊啓貴先生の「オランダ大統領登壇後のフランスの現状と今後」と題する講演があり、懇親会では、昨年秋の大学祭の仏語劇「美女と野獣」に携わった鈴木理紗子(監督)さんら現役学生5名の参加もあって和やかな雰囲気の中で会話が弾んだ。渡邊先生(=写真下)にはその後をフォローする形で、オランダ政権の現状につき執筆をお願いした。

オランダ政権誕生後一年のフランス

東京外国語大学教授 渡邊啓貴 (昭53)

<急速な人気低下>

ミッテラン大統領以後十七年目の社会党大統領として大いに期待されたオランダ社会党政権であるが、その人気は芳しくない。政権発足後わずか四ヶ月足らずで支持率は44%に低下、今年3月には30%にまで下落した。この急速な人気低下はミッテラン以後の大統領の中でも最低である。



とくにその人気低下の特徴は働き盛りの層と大衆層の支持率が激減したことにある。その主な要因としては、政策の正当性・有効性、さらに財政再建に対する期待はずれがあげられた(昨年九月の調査では、それぞれ53%、67%、76%)。

しかしオランダ大統領に対する期待はもともと大きくなかったという見方もある。大統領選挙の帰趨を決めたのはオランダに対する期待ではなく、サルコジ時代の政策に対する批判であったからであるという。いずれにせよ、地味で政策の特徴が分かりにくく、調整型のオランダの政治スタイルには、マリへの介入の即断を例外として、「事なかれ主義」のイメージがこれまでのところ



昭和43年卒までの出席者と現役学生

付いて回った。

もともとサルコジ大統領の意志強固で決定能力に秀でたイメージに対して、オランダを支持する人たちは感じの良さ・熱意・正直・信頼感・日常問題の理解度などでよいイメージを持っていた。<不支持の象徴と背景>

裕福な人たちからお金を吸い上げ(富裕層・法人への課税強化)、社会保障を充実というのが社会党政権の基本路線だが、実際には財政赤字解消のための三百億ユーロは法人・家計への増税による負担となり、不評を買っている。

そして批判が増幅した大きな理由は、オランダの経済政策に成果が出ていないことにある。その象徴はミッテラン時代のときに増え続けた失業者数が三百万人を超えたことである。「思った以上に危機は長引いている」、そして「もうしばらく成果が上がるのを待ってほしい」というのが昨年来のオランダ大統領がその答弁で繰り返してきた言葉である。

もちろん公約に従って、閣僚の資産公開・減俸に加えて、最低賃金の引き上げ、富裕層への75パーセント課税法、一部六十歳定年制などを定めた。しかし最低賃金の引き上げは公約の2%には遠く、0.6%にとどまった。富裕層への課税率引き上げが国庫収入を大きく増やしたわけではなく、他方で富裕層の資産の海外逃避を招いた。また年金給付の六十歳への前倒しは、実際はサルコジ時代に延長した積み立て期間をクリアした人を対象としてお

「中世」に浸るパリ旅行

藤倉洋一 (昭45)

今回の一週間の旅では、パリ市内を地下鉄で乗り継ぎ、思いっきり歩き回った。週末は、郊外にも足を伸ばし、画家シスレーで有名な街全体が公園のようなかわいい街モレ・シュール・ロワンなどをのんびり散策することも出来た。4月上旬だということに、まだ春は遠く冷たい風が吹いていたし、曇り空が多く雨にも少し祟られたが、非常に幸運なことに週末は太陽を拝むことができ、そこまで来ている春を肌で感じる事ができた。

パリに到着して2日目の夜、7時からサンジェルマン大通りを少し北に入った老舗カフェ「Procopé」で外語会パリ支部の集まりがあった。私の予定に合わせて、沼田睦子(昭44年)さんがわざわざセットしてくれたのだ。参加者は12名、うち10名はフランス語科出身。林正和さん(昭58年)選択のワインと各自がコースメニューから選んだ料理を楽しみながら、皆さんの近況を拝聴した。OECDやUNESCOの国際機関、金融機関に勤務する人もいるが、通訳業や日本語教師の方も多く、多士済々で皆生き生きとしている。皆さんの共通の悩みは子女の語学教育。完全なバイリンガルを育てるのはどこでも難しそう。夜会は12時近くまで和やかに続き、パリに住む同窓生の日頃の生活感がとてもよく滲み出ていて、切磋琢磨している皆さんの積極的な姿勢が大変遅く感じられた一時であった。このご縁もあって、出席者の一人神陽介さん(平成12年)にパリの生活に関し執筆(第2面)をお願いした。

今回の旅は「中世」をテーマにパリに乗り込んだ。目玉は、すぐ日本に来ることになっている『貴婦人と一角獣』展のタピスリーを観ることとパリ郊外の世界遺産プロヴァンを訪れることであった。

プロヴァンはパリ市内から車で一時間、フォンテヌブロー在住の知り合い夫婦に連れて行ってもらった。12世紀から13世紀にかけて栄えたシャンパーニュ地方の城塞都市で、カルカソンヌを小さくした感じ。商業、金融の要所として繁栄したという。家族でゆっくり周遊するにはうってつけのテーマパークであり、タイミングよく「La Légende des Chevaliers」と称する馬を巧みに操る野外ショー(中世時代劇)を鑑賞することができた。城の中央広場に面したレストラン「La Fleur de Sel」のクレープは美味なランチであった。

さて、『貴婦人と一角獣』のタピスリーである。パリに到着し

たその日、ホテルで一休みするまもなく、クリュニー中世美術館に向かった。ホテルは、カルチュラタンにあるから美術館は目と鼻の先だが、うっかり反対の方向に出てしまい、遠回りをする事になった。美術館のチケット売場で早速このタピスリーがまだ展示されているかと尋ねたものだ。日本での展示が近々予定されているのを知っていたので、もう出発していてもおかしくないタイミングだったのである。返ってきた答えは、あと、5日ほど展示されているとのこと、幸運であった。

思ったほど広くない暗い展示室にたどり着くと、そこには4枚のタピスリーしかない。パリの美術館でよく見かける光景だが、小学生のグループを地べたに座らせ、女教師がタピスリーの解説をしている。タピスリーは本来6枚なので、警備員に聞いてみると、欠けている2枚は日本での展示を前に修復中だという。ガイドブックには日本語の作品解説が置いてあるとあったが見つからず、ただただ、赤と青が基調のタピスリーに見入り、魅せられた。幻想的な雰囲気さえ漂っている。

そもそも一角獣に興味を持ったのは、かつて勤めた会社の社名に「ユニコ」がはいついてその由来がUnicorn(一角獣)であると聞いていたからだ。帰国して5月初め、六本木の新国立美術館に『貴婦人と一角獣』展を見に行ったら、今度はしっかり6枚である。広々とした会場に明るすぎるくらいの照明。しかも、詳しくすぎるくらいの大量の説明付である。違和感を覚えたのは、その説明が日本語と英語で、フランス語ではないことだった。

実は、トレイシー・シュヴァリエという英国作家が、小説『貴婦人と一角獣』を書いており、白水社から出版(木下哲夫訳)されている。小説ではあるが、このタピスリーがどのように制作されたかが、パリとブリュッセルを舞台に繰り広げられる二つの恋物語を挟んで展開される。私にとっては懐かしいブリュッセルのサブロン教会も出てくる。

女好きな細密画の絵師が主人公だが、その主人公と4人の貴婦人を含め都合7人が、それぞれ一人称で物語を紡いでいく手法で、男と女の心情、貴族や職人の生き様、架空の動物一角獣、タピスリーの主題である「視覚」「嗅覚」「味覚」「触覚」「聴覚」の五感と「それが私のただ一つの望み」の意味、千花模様など、著者はこねた表現で語りかけ、時空を超えた別世界に読者をタイムスリップさせてくれる。

タピスリーの最高峰といわれるこの『貴婦人と一角獣』だが、この小説を読んでさらに想像力を駆り立てられ、15世紀のパリとブリュッセルの世界にしばし浸ることができた。

(7月22日記)

り、国民一般の負担軽減になったわけではなかった。社会党政権の特徴でもある中小企業支援(減税など)とイノベーションの強調も成果をあげていない。成長促進策として、輸出積極策をとる企業に対しては政府融資と減税措置を実施、「公営投資銀行」・「産業育成勘定」の創設などは今後にかかっている。

確かに公約実現に努力している姿勢は認められるのであるが、実際にはそれほど大きな効果があると見えない政策が多い。改革は「シンボリックにすぎない」というのが実態である。<オランダ政権復活の可能性>

対EU政策は、サルコジ時代にメルケルドイツ首相の緊縮政策に同調して「メルコジ」とも揶揄された政策とは異なり、成長戦略重視に切り替えた点は南欧諸国から支持を得た。またその後の銀行統合にいたるこの夏までのEUの新たな経済金融統合への発展にオランダが尽力したことは明らかであったが、ユーロ圏全体の景気浮揚にはいたっていない。フランス経済の停滞感からドイツ主導の統合のイメージに隠れてフランスの陰は薄くなっている。外交政策としては、シリアへの介入を匂わせていたオランダ大統領であったが、急遽今年1月マリ介入を決定した。八月に新生マリの大統領が誕生して介入は一応成功と見られている。

社会政策としては、「すべての者への結婚」=同性愛結婚法を導入した。これは社会党政権ならではの進歩的な政策であり、評価されている。

ユーロ圏の経済が一応落ち着き始め、フランス経済の回復とともにオランダ人気が上昇の可能性がここになって出てきた。8月中旬に発表されたINSEE統計によると、仏経済成長率は2013年第2四半期に前の期比で0.5%を記録したからである。前の期は2期連続で0.2%のマイナス成長を記録していた。専門家は、雇用の回復が立っていないこともあり(第2四半期にも民間部門雇用数は0.2%減=2万7800人減)、慎重な姿勢を崩していないが、当初予想(プラス0.2%)を大きく上回る成長率は今後の見通しに光を射したことは確かであった。



昭和44年卒以降の出席者と現役学生

第19回 サロン 仏友会のお知らせ 《講演とボジョレ・ヌヴォオを楽しむ会》

日時: 2013年11月23日(土) 午後2時~5時
会場: 本郷サテライト 3F・8F
会費: 3,000円

2013年分通信費(1,000円)も同時に受け付けます。

《講演》 午後2時~3時半

講師: 岡本治男氏(昭和46年卒)
6年前に外務省を退職、現在も外務省非常勤。

演題: 「国際情勢の考え方」



岡本さんは、外交官として8か国で勤務。最後はドミニカ共和国大使として活躍されましたが、国際情勢を考

えるうえで我々が気づかない要諦などを語っていただきます。

《ワイン・パーティ》 午後3時半~5時

個別通知: 10月半ばに、メルアドに登録している会員にはE-mailで、その他の登録会員には往復はがきでご案内します。申し込み締切は11月5日を予定。

連絡先: 藤倉洋一(昭45)

fujikura1639919@waltz.ocn.ne.jp

Tel/Fax 048-822-4540

勝亦杏子(昭46)

anzuko@k08.itscom.net



パリからの「近況報告」

神 陽介 (平 12)

私は2000年3月にフランス語学科を卒業しました。同年秋に母校が府中へ移転したため、西ヶ原キャンパスの最後の世代となります。卒業後すぐに渡仏し、その後13年ほど経ちました。簡単に振り返りますと、当地で博士号(パリ政治学院 Sciences-Po、経済学)を取得し、日本政府の調査研究の職を勤めた後、現在、パリに本部を置く経済協力開発機構(OECD)にて国際公務員として勤務しています。

OECDは34カ国から成る、持続可能な経済成長を目的とした経済政策調整のための国際機関です。従前、より少数の先進国のみを加盟国とし、「先進国クラブ」などと呼ばれていました。(戦後、このOECD加盟が日本の先進国の仲間入りの象徴となった、という類の話に触れても、私の世代では隔世の感があります。)最近では加盟国・関係強化国を拡大し、活動領域を広げ、G20(20カ国財務大臣・中央銀行総裁会議)等の国際場裡の活動にもより積極的に関与しています。

藤倉会長より、パリの生活について執筆をとのことで承りましたが、仕事に追われまくる毎日で、その仕事は寧ろアングロサクソンの環境の下基本的に英語で行っています。私の所属する経済総局はOECDの中核にあって、マクロ経済動向や経済政策の分析を行っています。その性格上、純粋にアカデミックなものよりは、それを応用した専ら政策に資する分析となります。経済総局では、基本的に博士号取得者で相応の研究職経験のあるスタッフが、日

頃よりアカデミックな世界などとのつながりを通じ鍛錬を続け、また業務に際しては局内で大変な議論を重ねた上で成果を出します。そして、経済関連の省庁及び中央銀行からの代表団を交えた会合を重ね、政策に関する議論を行います。これは各国間の政策協調のための一つの場となっていると言えるでしょう。これら会合が年に一回の閣僚理事会へとつながります。一昨年はOECD創設50周年ということで内閣総理大臣をはじめ関係閣僚が来訪しましたが、来年は日本のOECD加盟50周年ということもありより一層の参画が期待されています。

普段はこうした業務に追われ、パリの生活を実感することもあまりないのですが、改めて振り返ってみますと、実はパリの街はあまり変わっていない感じがします。以前の職場では日本と当地の勤務を繰り返す外交官の方々とも一緒にでしたが、同様の話を何度か耳にしました。以前パリで勤務し、数(十)年を経てまたパリに戻ってみてもあまり変わった感じがしないと。ただし、人によって持つイメージや思い入れも恐らくは違うのでしょうか。いずれにしても、いろいろな生活の楽しみ方があると見受けられます。なかには、趣味が高じて各種の芸術的活動をされる方々、はたまたワインの資格を取得される方々もいる、といった具合です。私個人的には、当地では各種の展覧会やコンサートなどは枚挙にいとまがありませんが、時間を見つけてはこれらに赴いています。また相方の趣味でギリシャやイタリアを旅行で訪れたりしますと、例えば古代ギリシャ・ローマの遺跡を巡りつつ、また古典の読書に耽りつつ、我が国のように古代からの優れた文明が根底に存在すると、一瞬、感慨に浸ったりします。

素晴らしき人生！伊澤福雄さん

藤倉洋一 (昭 45)

昭和20年(1945年)卒の伊澤福雄さんから仏友会に『備忘録』が届いた。A版43ページの回顧録である。この1月31日に米寿を迎えた記念に、ご自身のこれまでを振り返って纏められた『備忘録』を読んで、直接話しを伺いたくなくなった。6月18日幹事の勝亦さんと一緒にご自宅に近い目白駅で落ち合った。粋なパナマ帽を被ったスマートな出で立ちでとても米寿には見えずお若い。近くの喫茶店で約90分、伊澤さんは大のおしゃべり好きだが、時代にキャッチアップしようとする好奇心がますます旺盛との印象を受けた。

「格子なき牢獄」などのフランス映画に憧れ、1942年第2次大戦が拡大する時期に外語を志願する者は少ないとの読みで、受験。現在毎日新聞社がある外語に横浜から通ったとのこと。勤労奉仕、空襲体験。戦後は、米軍の憲兵大隊勤務で始まり、スパイと噂を立てられ閉口した。その後、犯罪捜査も担当。50年の朝鮮事変勃発の頃日本橋の西川ふとん店の子会社にも勤務。商社の江商(株)(現在の兼松)に入社したときの初任給は899円。

55年の初の海外勤務では、羽田を発ち、ロンドンに赴任する途上のハンブルグまで55時間の難行苦行だった。63年マニラに赴任。「金がすべてに優先する」フィリピンで女中、庭師、運転手つきの優雅な生活を享受した。79年2度目のマニラ勤務から帰国。83年定年で兼松江商を退職。退職後も、経歴と

英語力が買われて、オーストラリアや証券会社、造船会社、建設会社で活躍した。海外勤務は通算約20年にもなる。2度目のマニラ勤務時には、激務から急性胃潰瘍出血で3000ccの血液(しかも、血液はRHマイナス)を失い意識不明になり、臨死体験をしたという。

この間、数知れない濃密な人間関係を構築されてきたが、古き良き時代を語り合う友人がだんだん少なくなっていくことに一抹の寂しさを感じるという。今の楽しみは、車を運転してデパートに出かけ、食品売り場を見て回ること。一番心配なのは、日本の若者に覇気がないことだ。会社の給料の半分は我慢料と考えよと忍耐知らずの若者に警鐘をならす。一匹狼を自認する伊澤さん。交渉はハードだが、約束は絶対守るという信条で、会社の中の付き合いより取引先を大事にするのがモットーだった。

この『備忘録』には“米寿”の重みが詰まっている。いつもでもお元気で！



伊澤福雄さんと勝亦杏子さん(昭46年)

昔日の青春 佛友會々報

80年のタイムカプセルを開ける 6

坂井英俊 (昭 40)

人の生と同じく、歴史とは移り変わり流れ行く事象間の「文脈」である。昭和8年当時の先輩方が辿ろうとした「青春の文脈」とは、おそらく献身という自己実現ではなかったろうか。

当時の会報を座右に歴史年表を開けば、昨7年の満州国建国宣言に続くヒトラーの独首相就任・山海関事件・日本の国連脱退・神兵隊クーデタの発覚・滝川事件など、猛々しい騒動の連鎖が目撃するが、この年3月にはあの三陸沖地震・津波が発生、流失3000戸・死者1535名の惨事をもたらしている。が、年末には皇太子(今上・平成天皇)生誕の慶事があり、国民は祖国の弥栄を祈った。この年「非常時と国民の覚悟」なる文部省通達が出て、没・世間だった学園にも「国家意志」が制度化され始める。ところが、わが「会報」の屈託ない投稿文を見る限り、先輩方は少しも意に介しておらず「非常時どこ吹く風」である。当時、押さえ込まれたマスコミは軍部と国民が喜ぶような威勢のよい誤報・作文で売り上げ部数を伸ばし、一般国民は「連戦連勝の日本」しか知らず不吉な記事は読みたくもなかったのである。わが外語学校生は語学によって国際眺望のきく窓口にはたはずであるが、ときの思想統制・言論統制が、何も許さなかった。小林多喜二が拷問・

虐殺された年である。

ひどい恐慌の時代。学生は赤貧洗ふがごとき貧困にあえいでいた。だが、そんな時代なればという思いからか意地からか、彼らは「外語名物の語劇」には、まるで高校野球のように師弟一丸となって闘志を燃やし、理想の舞台実現を目指して努力した。世間の慢性的な不安と脱・娯楽の風潮のなか「外語の語劇」は少なからぬ注目を浴びており、招かれた各国大公使、西洋劇を取り込もうと腐心していた新劇の役者が「見学」にやってくるかと思えば、「この非常時に男が鬘をつけ厚化粧の女装をすることはなにごとぞ」という「軍国の番犬気取り」からの非難、あるいは一言居士たちの「語劇無用論」、また滝川事件による盟休(ストライキ)などから物心両面への深手を負いながらも、彼らは、やがて来る赤紙の宿命を胸に深く潜め、不撓不屈、無償の青春ミッション「我らの語劇」を遂行していったのである。はたしてフランス語科の舞台は人気ナンバーワンの圧倒的好評を得たという。会報には写真とともに、そのときの熱い感激が切々と綴られる。曰く、

<級友諸君の共同生活に対する確固たる努力の業績は、他級にその比を見ぬと公言して憚らない。此の団結、協力の力あったからこそ斯かる優秀な成績を残したものであると云っても過言ではあるまい。吾々は先生方並に先輩後輩諸氏よりの絶大な御援助に対して充分にお禮を申す機会をなきを遺憾とする

『ピアニスト』(原題 Piano chinois)

エティエンヌ・バリリエ著 鈴木光子 訳

アルファベータ社 2013年3月31日発行 1,995円

鈴木光子(昭36)

2人の音楽評論家が、1人の東洋人の美人ピアニストに対する賛否両論の批評を、ブログとメールのやりとりで戦わせるという手法で書かれたこの小説は、登場人物に実際メールしそうな臨場感を持つ。モデルは、弱冠26才の中国人ピアニスト、ユジャ・ワン。

スイス人の約20%が母語とするフランス語は、正統フランス語とさほど違いはないが、やや重苦しく回りくどい。音楽における「視覚」の意味から、東洋人は真に西洋の音楽を理解できるのか否か、西洋音楽とは何なのかへと議論を展開する。

翻訳中に痛感したのは、むしろ西欧式の議論の仕方。日本式のウエットな論法ではとても歯が立たない。又、日本人に漢文の基本が身につけているように、西欧人にはギリシャ・ローマの哲学が血と肉になっている実感。この翻訳は、まさしくこの温度差と血筋を一本にまとめる作業だった。



助っ人隊募集(幹事のつぶやきから)

- 「サロン仏友会」も今年で第19回目。思い起こせば、1996年吉日、当時の西が原キャンパス内の「生協の学食(=旧・健ちゃん食堂)」に、フランス科OB有志が結集し、「仏友会が復活スタート」。年一度の和やかな集いの他に、粋なひと時を過ごせる企画を、という提案をきっかけに、2001年「サロン仏友会」が誕生。
- 以来、多くの声援と期待、そして心強い参加と協力のもと、「講演とワインパーティ」の二本立て企画がすっかり定着したのは、どなたもご存じの通り。
- そこで 今回も「当日の協力お手伝い」をお願いしたいと思います。
- ①会場づくり(机椅子並べ、掲示等)。
- ②講演後のパーティ会場の準備(ワイン、つまみ類並べ等)。
- ③記録(写真、投稿等)や各種機器関係での現場サポートも嬉しいです。
- お気持ちのある方は、サロンへの参加お申し込みの際に、その旨を添えていただきたくご連絡をお待ち致します。(結局、かなり積極的なお願いとなりました。)

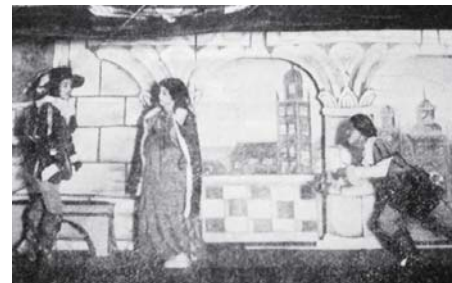
(和賀千恵子 昭45)



仏友会会計報告

(2012年4月1日~2013年3月31日、単位:円)

収入		支出	
前年度繰越金	873,322		
2012年総会費	260,000	2011年総会費用	343,147
通信費等	233,900	「LA NOUVELLE」発行費用	156,150
サロン仏友会会費	147,000	サロン仏友会費用	135,944
		大学語劇支援金	30,000
		ゆうちょ銀行振替手数料	11,160
		田島英子様香典、供花	35,803
通常貯金利息	104	雑費(文具、郵送料、コピー)	3,805
合計	1,514,326	合計	716,009
次年度繰越金	798,317		



昭和8年フランス語科の語劇「エルナニ」

が今回の「エルナニ」の大成を以て報恩の一助と為し得たならば悦び之に過ぐるものはない。(高野俊郎氏) >

<されば、後輩諸君よ、諸君が僕達以上の団結と準備と努力

を以てすれば諸君は必ずや僕達の劇よりも遙に優れた劇を上演し得る事を断言する。(宇井秀夫氏) >。遺言のような叫びも、時空を超えて後世われわれ後輩の胸に突き刺さってくるかのようである。

しかし、こうした学園生活も、運命の徴兵に應ずるや有無を言わず戦という驚天動地の凶暴な世界へ投げ込まれる。彼らの純真・健気な「青春の文脈」は踏みじられ引きちぎられた。が、彼らは美しい文脈を忘れることはなかった。<東洋のことに關心を持たぬ白い人達に優しい日本の半面を知らせることの急を知っている私、孤軍奮闘せざるを得ません。まして日支問題以来日本はシュライヘルのミリタリズムと同一視されてみす今日・>と悲しく書いたのは松尾邦之助氏(読売特派員)であった。(次回へつづく)